

「ほめ」の受け止め方に関する研究 — 就学前後におけるポジティブフィードバックの意味の相違 —

青木直子

問題と目的

子どもにとってほめられるということは自分自身の存在価値の肯定(高崎, 2002)や自己の行動の正しさと大人に受け入れられる確信・安心(岡本, 1994)を意味し、知識・情報と感情の2側面に大きな影響を受ける体験である。そのため、適切なほめ方の検討(スティベック, 1999)、教師の用いる「ほめ」の機能の検討(Brophy, 1981)、「ほめ」が動機づけに与える影響の検討(たとえばKamins & Dweck, 1999; Anderson, Monogian & Reznick, 1976)など、ほめることの効果を議論の中心としたほめ手側からの「ほめ」に関する研究は数多く行われている。だがその一方、ほめられる側の「ほめ」に対する認識・感情を扱った研究は少ない。そこで本研究では「ほめ」の受け手側からの「ほめ」に関する研究を行う。

研究1では子どもが受けている「ほめ」を調査し、それらが対人報酬のリスト(Turner, Foa & Foa, 1971)による分類が可能であることの提示を目的とする。このリストはlove(愛情の深さ・暖かさ・慰めの表現)、status(名声・注目・尊敬の高低を示す評価的判断の表現)、information(loveやstatusに分類される行動を含まないアドバイス・意見・指導・啓発)、service(他者のために行う行動・それにより提供されること)、goods(実体のある製品・用具)、money(コイン・紙幣・交換基準のあるトークン)の6項目からなる。

研究2ではポジティブなものとして受け止められた「ほめ」が実験課題への動機づけに与える影響の検討を目的とする。「ほめ」による動機づけの向上は認知的評価理論や強化理論により説明されるが、「ほめ」がポジティブな感情・ムードを生じさせるためという説明も可能である。そこで、研究2では研究1で明らかになったポジティブに受け止められた「ほめ」の学年差を処遇に反映させた実験を行う。

研究1

<方法>

(a) 子どもが受けている「ほめ」に関する調査

調査協力者: 年長児35名・1年生30名

方法: インタビュー

質問項目: ①ほめられた内容、②お手伝い場面でのほめられ方、③達成場面でのほめられ方

(b) 保護者が行っている「ほめ」に関する調査

調査協力者: (a)の調査協力者の保護者65名

方法: 子どもをほめた内容やほめ方に関する自由記述式の質問紙調査(回収率56.9%)

<結果>

ほめられた内容は①できなかったことが初めてできた、②何かがよくできた、③好ましい行動が取れた、④お手伝いをした、⑤勉強をした、⑥その他、の6つに分類した。フィッシャーの直接確率法により報告内容の出現比率を学年間で比較したところ、有意差はなかった。報告の多かったものは①②④であった。子どもの報告と保護者の報告したよくほめる内容の出現比率には差がみられた。1カテゴリーの報告数とそれ以外の報告数をボンフェローニの法により有意水準を.0083として下位検定をしたところ、②は子ども、③は保護者から多く報告されていた。

ほめられ方はその「ほめ」を期待する、またはその「ほめ」によりポジティブな感情になったことが確認できたものを分析対象とした。お手伝い場面でのほめられ方の出現比率には学年差がみられた。1カテゴリーの報告数とそれ以外の報告数をボンフェローニの法により有意水準を.0125として下位検定したところ、「すごい・上手」といったstatusを伝える「ほめ」は年長児から多く報告されていた。次にカテゴリーを2つずつ組み合わせ、ボンフェローニの法により有意水準を.0083として下位検定したところ、loveを伝える「ほめ」とstatusを伝える「ほめ」に有意な傾向がみられた。「ありがとう」などのloveを伝える「ほめ」は1年生から多く報告される傾向にあった。達成場面でのほめられ方には学年差はみられず、どちらもstatusに分類される「ほめ」が多く報告された。2場面でのほめられ方についても子どもの報告と保護者の報告の比較を行ったが、ともに出現比率に差はみられなかった。

<考察>

「ありがとう」などloveを伝える「ほめ」はほめ手からの暖かな感情を含んだものだが、評価的側面は弱い。だが、「すごい・上手」などのstatusを伝える「ほめ」にはほめ手からの明確な評価が含まれている。お手伝いという活動は結果の成否を区分する明確な指標がなく、到達度・達成度の判断しにくい活動である。特に、評価基準の確立途中にある年齢の低い子どもは成功の判断を絶対的評価に依存している(Blumenfeld, Meece, &

Wessels, 1982) ため, お手伝い場面のできばえを自己評価することは難しい。そのため, 年長児は1年生に比べ, 自己の行動に対する評価を含む直接的に示すstatusを伝える「すごい・上手」などの「ほめ」を多く報告したと考えられる。

達成場面はできなかったことができるようになるという活動の達成度が明確な場面である。このような場面でのstatusを伝える「ほめ」はお手伝い場面とは異なり, 評価基準としての「ほめ」ではないと考えられる。Harter (1981) は「ほめ」には情報機能と感情機能があり, それぞれの機能にはincentive functionとaffective function, general levelとspecific levelがあると述べている。これを参照すると, ほめ言葉としては同一の「ほめ」であっても, 「すごい」という「ほめ」はお手伝い場面では行動の基準や目標を示す情報機能を持ち, 達成場面では満足感や効力感を与える感情機能を持つと考えられる。

研究2

<方法>

調査協力者: 年長児31名・1年生48名

実験の手続き: ①自由に過ごしている子どもたちのところに行き, スタンプ押しのお手伝いをしてくれる人を募る。②実験者はA4の画用紙を切り, 調査協力者はカットされた画用紙に猫のスタンプを押す。③2分後, 作業を一旦中断させ, 出来具合を見ながらA群には「わあ, ありがとう, 助かるわ, ○○さんありがとう」, B群には「わあ, 上手, できたね, ○○さん上手」とほめ, C群には肯定的に頷く。④他の仕事をしたいので続きをやっておいてほしいことと休んでもよいことを伝え, 実験者は子どもの視界に入らない位置で子どもに背を向けて座る。⑤5分後, 子どものいる位置に戻り, 処遇の再生・再認と以下の評定を行う。

評定項目: ①実験課題遂行能力の自己評価, ②実験課題の楽しさ, ③次回への意欲。表情画を用い, 5段階(①②)または3段階(③)で行った。

<結果>

処遇前の2分間の遂行量に条件間で差がみられないことを確認した後, 処遇後に1人で押したスタンプの枚数について2要因分散分析を行った。交互作用がみられたため, ボンフェローニの法により下位検定を行ったところ, A群における学年の単純主効果, B群における学年の単純主効果, 1年生における処遇の単純主効果がみられた。A群は1年生, B群では年長児の方が遂行量が多かった。また, 1年生の場合, B群よりもA群の方が遂行量が多かった (Figure 1)。

各評定項目について2要因分散分析を行ったところ, 能力の自己評価・次回への意欲には主効果がみられなかつ

た。楽しさの評定には交互作用がみられ, ボンフェローニの法により下位検定を行ったところ, C群における学年の単純主効果と1年生における処遇の単純主効果がみられた。

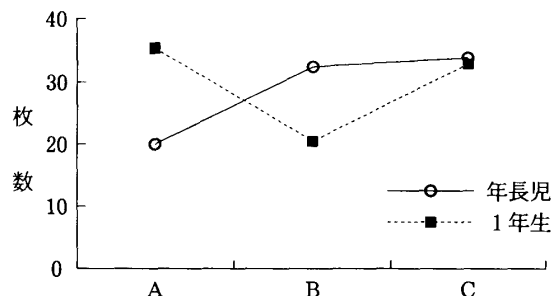


Figure 1 5分間に押したスタンプの枚数

<考察>

研究1によりお手伝い場面では「ありがとう」というA群の処遇は1年生によってポジティブ, 「上手」というB群の処遇は年長児にとってポジティブ, つまり感情的評価の高いことが明らかになった。A・B群に与えられた処遇はどちらもほめるというものであり, 少なからずポジティブな条件である。だが, 実験者には同様にポジティブな処遇と考えられるものであっても, 「ほめ」の受け手である子どもにそのような認識の違いがある場合, 受け手の感情的評価が高い「ほめ」の処遇の方が作業への動機づけを高めていた。研究1ではポジティブなものとして受け止められた「ほめ」が学年によって異なることを示したにすぎなかったが, 研究2によってそれらの感情的評価の差異が動機づけにも影響していることが確認された。

5分間での遂行量は統制群であるC群とA・B群を比較しても有意差がみられなかった。Anderson et al. (1976) などでは「ほめ」の処遇を与えない統制群は自由時間における実験課題への取り組みが減少することが示されている。だが, Lepper, Greene, & Nisbett (1973) では実験中に実験者が子どもの描画に関心がある態度を示し, 実験終了後に統制群の子どもに対しても「絵を描いてくれてどうもありがとう。とてもよくできていたよ」という反応をしたところ, 実験後の実験課題へ取り組む時間が上昇するという結果が得られている。研究2でもLepper et al. (1973) と同様に統制群の子どもに対し, 頷くというポジティブな状況で実験を行った結果, C群の遂行量は「ほめ」の処遇を与えたA・B群と比較して少なくなかったことから, 直接的に子どもに対してほめる・賞を与えるといった処遇を与えない場合であってもポジティブな状況を保ちながら実験を行うことによって統制群の動機づけは低下しないことが示された。